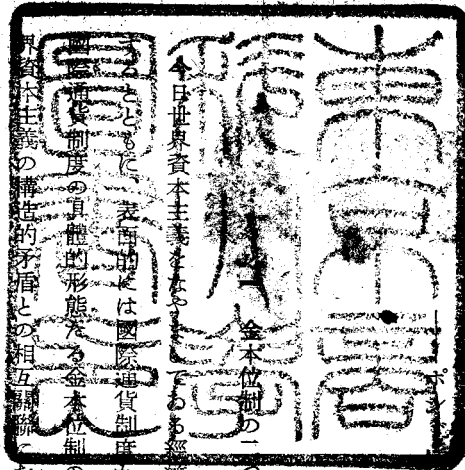


國際通貨制度における金の問題

下およびドル切下をめぐりて——

宮田喜代藏



金本位制の二つの矛盾

今日世界資本主義をなす経済的苦惱は、最も深いところでは資本主義經濟に内在する構造的矛盾に基因をもつて、表面的には國際通貨制度から強制される機構的矛盾に由來する部分を含んでゐる。吾々は直接的には通貨制度の具體的形態たる金本位制の機構的矛盾から生ずる金問題を取上げるものではあるが、これをば深く世界資本主義の構造的矛盾との相互關係において把握してゆかんとするものである。

いま國際金本位制のもつ機構的矛盾の一つは世界金存在の不足から生ずる普遍的な不況であり、他の一つは金の各國間への配分の不均衡から生ずる國際的な不況である。然るにこの二つの金問題は一世紀以上にわたる世界金本位制の發展過程の各段階においてそれぞれ異つた解決の道を辿つて來てをり、その解決方法の相異のうちに各時代の世界經濟及び國際通貨制度の特異性がうかがはれる。現在この二つの金問題はポンド切下及びドル切下の問題といふ具體的な形をとつて登場してゐるのであつて、これがいかに解決されるかによつてブレトン・ウッズ基金制の示唆する新

國際通貨制度における金の問題

しい國際通貨制度の成否が試験されようとしてゐる。本稿の目的は國際通貨制度における二つの金問題の現段階的表現としてポンド切下及びドル切下の問題を取上げてそれのもつ性格を明かにすることに存してゐるが、なほそのことのうち今日世界資本主義をなやましてゐる經濟的苦惱の側面を把握する道をも開きたいと望んでゐる。

ここに金本位制とは一定比率による貨幣と金との相互轉換を通じて貨幣價值の安定化を圖らんとする貨幣制度ないし貨幣行政である。金本位制は法定金平價による貨幣と金との自由轉換を實行し且つ金の自由なる輸出入を許すことを通じて、國內的には金の價格を固定化し、且つ對外的には爲替相場を一定の限界内に安定するといふ直接的な効果を發揮する。次いで金本位制の有機的機能としては、一方この固定された金の價格を媒介として國內物價を國際物價水準と均衡するやうに調整するといふ作用をつくしてゐる。この事態關聯はとりも直さず、一方國內物價を金價格と均衡せしめ、他方では國內物價を爲替相場に均衡せしめるやうに調整する作用なりと解釋することができ(註)る。

(註) 拙著「平價切下の理論」昭和二十二年、三六五頁

以上の金本位制機能の分析からして、金本位制の機構を通じていかにして經濟的不況が生起するかを了解することができる。第一、インフレーションの起つた場合、騰貴した金生産費が固定せる金價格を上廻るに至れば、金産額の減退を惹起し、通貨の收縮を通じて國內物價を舊水準にまで引下げようデフレーション的作用が起る。第二、インフレーションの起つた場合、騰貴した國內物價が固定せる爲替平價を上廻るに至れば、——國內物價が國際物價を上廻ればと言つても同じである——輸出不振・輸入促進の結果として金の流出↓金準備の減少↓通貨の收縮を通じて國內物價を舊水準に引下げようデフレーション的作用が起る。第三、金生産費の方が上騰して法定の金價格以上に

なつた場合には、金産額を減少せしめ、もつて一般的物價水準を引下げるといふ積極的デフレーションを實現する。

第四、國際物價の方が下落して國內物價を下廻る場合には、輸出不振・輸入増大の爲め金の流出↓通貨收縮を通じて國內物價を引下げる積極的デフレーションを招來する。いま第一と第二とはインフレーションによつて自國物價が發動的に變動した場合、金本位制の經濟均衡化作用がこれを調整して舊水準に引戻す舊狀回復の途において生ずる機械的デフレーションである。それは或る意味では調整的安定化と解することができるが、しかも、なほ一度發生したインフレーションを舊狀に回復せしめる過程において生ずる經濟的不況は、收益原理に立脚する資本主義にとつては經濟的苦惱を意味する。従つてインフレーションを收束せしめるといふ場合であつてさへも、資本主義秩序においてはなほ騰貴した物價水準を舊狀に回復するデフレーションの道を避けて、既に事實上騰貴してゐる物價水準をそのまま現狀維持する狹義の安定化政策を採らんとする。これに對して第三及び第四の積極的物價引下作用に基づくデフレーションはいかなる意味においても貨幣價値の安定化と解することはできないのであつて、この關係においては金本位制の經濟均衡化作用は價値擾亂化であると言はねばならぬ。いま吾々の主題とする金問題についてみるに、金の生産費の騰貴によるデフレーション化の過程は、金鑛の年々の産金量が絶對的に減少して來る場合にみられるが、さらに國民經濟の發展率に對應するだけの金増産が従前の生産費をもつてしては困難なる場合にも見られる。そのうへこの不足せる世界金存在の各國への配分が偏在する場合には、金の缺乏せる國は深甚なデフレーションに襲はれることとなり、この一國デフレーションはやがて金本位制の均衡化作用を通じて國際的デフレーションにまで擴大されてゆくこととなる。然るに資本主義經濟の存在のためには収益の持續的獲得の保障されることが必要であつて、物價下落と收

益減退をもつて特質づけられる經濟的不況はその最も苦惱するところであるから、資本主義經濟にとつてはかうした金不足及び金偏在に原因するデフレーションは正に金本位制に内在する機構的矛盾であると言ふことができる。然らばこの金不足及び金偏在に由來する機構的デフレーションは、金本位制發展の各段階においていかに解決されて來たであらうか。

二 第一次大戰前の自由金本位制

第一次大戰前の自由金本位制の段階においては、かうした機構的デフレーションは現實に暴露されることなく、從つて世界金本位制はよく國際通貨制度としての機能を果しえた。

第一、十九世紀の初頭イギリスが金本位制を採用して以來第一次大戰の勃發するに至る一世紀間、世界的金生産は資本主義經濟の發達を支へ、且つこれに即應する國際通貨制を維持するに必要な金需要量を供給することができ、よく長期的不況を挽回することに役立つた。最初の長期的不況の底に近い一八四〇年代から米國カリフォルニア及び濠洲に、第二回の不況の底に近い一八八〇年代には南アフリカに新しい金鑛が発見されて好況への轉回を促した。尤もかかる金鑛の發見と雖も全く偶然の出來事と解すべきではなく、物價下落に伴ふ金生産費の低下にも拘らず金本位制の下において金價格が固定化されてゐるため、産金が著しく有利となつてゴールドラッシュを誘發した結果なりと解することができる。従つて物價下落↓金産の増加↓景氣上昇といふ一連の事象關聯は、金本位制の自動的調節作用の發動の線に沿ふて實現されたものであるといふことができる。

第二、當時の自由金本位制においては、世界經濟均衡化の作用が可なり有力に働いてゐたうへに、世界金本位制の運営がよろしきをえた爲めに、金本位諸國の間における金の配分の偏在から生ずる機構的デフレーションを生ずることなく済んだ。イギリスの如き先進資本主義國と其他の後進國とが異質的構造をもつて相互に補充し合つて全體としての世界經濟を構成してゐた爲めに、國際經濟的均衡の實現は容易であつた。尤も生産力の高い先進國が後進諸國に對して輸出超過を結果することを免れなかつたが、しかし出超國の地位に立つてゐたイギリスは出超の差額のすべてを金で受取らないで後進國に對する投資に充用してその經濟開發を助成したから、よく國際經濟の均衡化が實現されて行つた。かくして第一次大戰前の古典的金本位制の段階では、世界金存在の不足に基く一般的デフレーションも、また金の配分の不均衡に基く國際的デフレーションも顯現するに至らなかつたと言ふことができる。

三 第一次大戰後の統制的金本位制

一九一四年世界大戰の勃發とともに世界各國の金本位制は停止されたが、一九一八年戰爭の終熄後間もなく再び世界の重望を荷つて回復した。然るに大戰後においては、金準備の増減に順應して通貨數量が自動的に増減せしめられる自由金本位制から通貨行政によつて通貨數量が人爲的に調節される統制金本位制へ移り、また國際通貨政策の目標も従來の爲替安定第一主義から國內物價の安定といふことに變るに伴つて、世界金本位制のもつ世界經濟均衡化の作用は著しく弱められた。しかもこの戰後の金本位制の運営を複雑化し且つその維持を困難ならしめた通貨側の要因は金産額の減少と金配分の偏在である。

第一、戰爭中及び戦後にかけてのインフレーションの爲め金生産費が騰貴して來たにも拘らず金價格が舊水準に維持されたままであつたことが、世界金生産を減退せしめることは冗言を要しない。事實戦後の世界金生産は戦前に比して絶對量において減少してゐたのみでなく、世界貿易及び經濟發展の長期的傾向に照らしてみても相對的に減少してゐた。それゆえ一九二〇年代に世界各國が再び金本位制に復歸するに至るや、世界における金産額の減小ひいては貨幣用金ストックの不足は各國の經濟的活動及び世界貿易の發達を阻害することとなり、茲に世界的規模において長期的不況を誘發することとなつた。

第二に、戦後においては世界金本位制そのものがその自動的調節作用を喪失して國際收支の均衡化ひいては金の正常的配分を充分に實現しえなくなつて來た。そのうへ米國は戰爭を通じて債務國から債權國に變り、且つ其後も輸出超過の爲め絶えず金の流入をみてゐたにも拘らず、海外投資によつて積極的に世界的均衡化を圖らんとする態度に出る事を躊躇したため、世界の金の大きな部分が續々米國に集中し、これが金の偏在に原因する國際的不況を促進することとなつた。

かくて戦後の世界金本位制の下においては、金本位制を維持することが國內的に物價低落を惹起して經濟的活動の正常なる發達を妨害するとともに、國際的に世界貿易を萎縮せしめ、双方の側から迫つて持續的不況をば國際的規模において促進することとなつた。そこで一九二九年に世界的恐慌に轉入して各國が一般的物價の急落と世界貿易の萎縮に遭遇するや、これに對處するために或る國は金本位制から離脱を餘儀なくされ、或る國は平價切下を斷行して金不足よりうけるデフレーションの重壓から脱却せんとした。即ち一九三一年には金本位制の宗山たりし英國が逸早く

金本位停止を實行して爲替引下と物價上騰を惹起した。これに續いてスターリングブロックの諸國及び北歐諸國が同様の道を辿り、同年末日本も金再禁止による爲替下落と物價騰貴を體驗した。これらの爲替下落國の重壓によりアメリカも亦一九三三年金離脱を餘儀なくされ、ひいて一九三四年一月平價切下によつて金本位制に復歸した、このアメリカの平價切下に刺戟されて當時なほ金本位制を維持してゐたフランス、イタリヤ、ベルギー、スイス、チェッコスロバキア等々も亦平價切下を實行した。かくして殆んどすべての國々が競争的に爲替引下を實行した結果、これらの國々の一般物價を騰貴せしめるとともに輸出の促進に役立ちもつて經濟不況を打開する効果をもたらしたが、しかし他面かうした爲暴引下競争は遂に世界經濟戰爭を誘發して國際不安にまで追込んだものである。それゆゑ一九三〇年代の世界恐慌期においては、國際通貨制度上の二つの金問題は爲替引下競争により國際不安といふ犠牲を拂つて克服されたといふことができる。

さて一九二九年から一九三七年にわたる世界恐慌とその回復期において、かくの如く殆んどすべての金本位國が事實上又は法律上の平價切下を實行して爲替引下を實現した後とに残された状態を結果としてみると、一方全金本位國の通貨の對金平價が一齊に一律的に切下げられてゐるといふ事實と、他方各國の平價切下率の差異だけ各國相互間の爲替相場が變更されてゐるといふ現象とが残されてゐることが了解される。事實上の平價切下の行はれた國々では金價格が引上げられて残り、法律上の平價切下の場合には通貨の法定金量目が改訂されたままである。尤も金本位國がすべて金平價ないし爲替相場を切下げた結果、各國相互間の爲替相場のうち共通なる率だけは相殺されて表面化しないであり、只各國の平價切下率の間に差異のあつただけ、それらの國々の間の爲替相

場の舊水準が改訂されてゐるといふ事實が見出される。若し二國の平價切下率が同じ割合であれば、相互間の爲替相場は舊水準に回復してをり、若し二國の平價切下率に相異のある場合にはその差異だけが兩國間の爲替相場の改訂として表面的に残つて来る。かやうに全金本位國の平價切下に共通なる切下率は、各國間の爲替相場のうへには現はれてゐないが、しかもなほ全金本位國がこの共通なる割合だけ一齊に一律的に平價切下を行つてゐるといふ事實の存在することを看過してはならない。そしてかうした全金本位國に共通せる平價切下率こそ全金本位國の通貨が一律的に金平價を切下げる謂はゆる一般的平價切下 (General devaluation) たる性格をもつものであり、従つて全金本位國の通貨と金との平價關係の一般的な不均衡を是正するといふ効果をもつものであつた。

いまこの事態關聯を具體的にみるに、各國の爲替相場が對米相場として建てられてゐる限り、爲替引下・平價切下は對米爲替の引下げとして表現される。それゆゑ一九三〇年代に行はれた全金本位國の爲替引下競争の結果は、一方では各國の爲替相場の基準となるアメリカ自身が四割の平價切下を行つてゐる限り、アメリカを含めた全金本位國が共通に一律的に四割の金平價切下を實行してゐると解釋することができる。換言すれば、各國の平價切下率のうちアメリカと共通する部分たる四割については、全金本位國の通貨の一般的平價切下が行はれたと解釋できる。そして他方米國の平價切下率(四〇・九六%)と各國の平價切下率との差異だけが各國の對米爲替の改訂として表面化してゐることとなる。

かく觀て來ると一九三〇年代に各國の實行した爲替引下工作は經濟不況の重壓に堪えかねて各國の利己的な立場から國民主義的な精神で行はれたものではあつたが、しかも全金本位國の爲替引下競争の全面的結果を回顧すれば、殆

んどすべての金本位國の通貨の對金平價が一律に約割だけ切下げられたといふ事實と、各金本位國相互間における爲替相場が變更されたといふ現象が實現されてゐる。而して前者の事實は大戦後の世界金の不足による金本位制的矛盾を打開するといふ役割を演じてをり、後者の現象は各國相互間の根本的不均衡を是正するに爲替相場を調整するといふ役割を演じてゐるのである。それゆゑ第一次大戦後の經濟恐慌に表現された國際通貨制度の機構的矛盾たる金不足及び金偏在は、全金本位國の行つた爲替引下競争の結果のうちに實現されたそれぞれ一般的平價切下と各國間の爲替相場の改訂によつて解消されたといふことができる。

四 第二次大戦後のブレトン・ウッツ基金制

第二次大戦後における國際通貨制度はブレトン・ウッツ基金によつて代表されてをり、これは今後少くとも資本主義群に屬する國々の間における國際通貨制度の核心をなすものといへる。このブレトン・ウッツ基金制の下では古典的金本位制の機能は弱體化されてはゐるが、しかもなほ一方各國の通貨と金又はドル貨との間の平價は固定化されてをり、他方この爲替平價を基軸として國內物價と國際物價とが均衡化されるといふ世界經濟的作用は制限された範圍内においてはあるが働いてゐるから、これを新しい型の金爲替本位制と解釋することは不當ではない。

さてブレトン・ウッツ協定の示唆する國際本位制は二つの指導精神を持つてゐる。第一、同基金の條文はその目的の一つとして「爲替の安定を促進し、加盟國における秩序ある爲替協約を維持し、且つ競争的相場切下を避けること」を明かにしてゐる。これによれば、自由に爲替相場の變動するのに放任する自由本位制の態度を排して、爲替の安定

を促進し、これを一定の水準に確定せんとする態度をとつてゐることが知られる。また世界恐慌期に採用された諸國の景氣政策的平價切下が、爲替相場の引下競争に陥つた無秩序を避けて、確定の爲替相場を平價として規定し、これを任意に競争的に變更することを嚴重に禁止してゐる態度がうかがはれる。第二、同條文第四條第五項は「加盟國は根本的不均衡を是正するための外は、その通貨の平價の變更を提議することが出来ない」旨を明かにしてゐる。これによれば國際間に根本的不均衡を生じ、在來の爲替相場を維持してゐる限り、不況が促進されて經濟的活動、雇用及び所得水準が不當に引下げられるおそれのある場合には、同基金に提議して自國通貨の平價切下を要求する道が開かれてゐるのである。

古典的金本位制が爲替相場の固定化を前提として、國際物價と自國物價との均衡化を實現せんとするため、國內物價の變動、國內經濟活動の動搖を惹起せしめた危険を防止せんが爲めに、必要とあらば爲替相場を合理的に調整してゆかうという態度を示してゐる。また第一次大戦後の統制的金本位制では國內物價水準の安定を第一目標として通貨政策を運営した爲め、世界恐慌に當つては各國は相競つて爲替引下を行ひ、ここに世界經濟戦争を惹起することとなつた。かかる經驗を経た第二次大戦後の新しい國際本位制では、一方各國の國民主義的精神よりする爲替引下競争を嚴重に戒めると俱に、他方國際的均衡化作用のため自國が不當にデフレーションに押しやられることを防止するため根本的不均衡を是正する目的をもつてする平價改變を承認してゐるのである。

ブレトン・ウッズ基金制は戦後逸早く出發し、一九四六年十二月下旬に開かれた第一次總會では參加國のうち三十一ヶ國について當初的平價が決定された。然るにこれらの當初的平價は一九四四年七月當時における各國通貨の金平

價を基準として決定されたものであつたから必ずしも正常的水準を表はすものではなかつたし、そのうへその後における客觀的情勢の變更のため益々妥當性を缺くに至り、早晚合理的なる改訂の必要であることが漸く認識されて來てゐた。いま同基金制發足後の實際上の経過をみるに、大戰後のインフレーションに悩める各國はインフレーション進行中の抑制策として各種の通貨政策を採り、又インフレーション收束後これが處理策として各種の通貨措置を講じ、最近に至つて世界的不況に轉入するやデフレーション對抗策として通貨措置を必要とするに至つてゐるが、その都度ブレトン・ウッズ協定における當初的平價の改訂が問題として取上げられて來た。

まづインフレーションを豫防又は抑制せんとする對策として爲替相場の引上工作を採用せる實例は、既に早く一九四六年七月カナダ（七月一日一〇%）、スエーデン（七月十二日一七%）、ブラジル（七月二十三日七%）の三國においてみられる。その目的とするところは一方アメリカのインフレーションの影響をうけて自國の物價水準の上騰せんことを豫防するとともに、他方輸入の増大を容易にすることにあつた。資本主義社會においてはデフレーションに對抗して物價騰貴を促し且つ輸出を振興せんがために採用される平價切下が實踐的に重要であり且つ最も屢々みられるところであるが、しかも第二次大戰後の如く世界的インフレーション時代において物價上騰を防ぎ且つ輸出よりもむしろ輸入を有利ならしめることを必要とする場合には平價引上・爲替引上の措置をとることが問題となるのである。なほ最近（一九五〇年二月末）ソ連が平價引上を實行したことも、これによつて國內物價の引下げられることを目標とせるものである。ソ連は一九四七年十二月十分の一の通用價值切下を實行したとき、これに裏付けられて重要商品の價格の引下げを行つたが、今回の金平價引上においても亦これに裏付けられて物價引下を行ひもつて國民の實質所得を向上

せしめんとすることを企圖してゐる。

これに反してブレトン・ウツツ協定へ参加の後輸出の促進を目的として平價切下を實行した實例としては、まづイタリヤが一九四七年十一月に三五・七二%—六五・三九%の巾をもつた爲替平價切下を行つたのと、フランスが一九四八年一月に四四・五四%の平價切下を、さらに一九四九年十月に一八・七一%の實質的平價切下を意味する新措置をとつたことを擧げることができる。しかしブレトン・ウツツ機構の下における平價切下として代表的なものであり、且つ實踐的にも極めて重大な効果をもつものは、一九四九年九月中旬に實行されたイギリスのポンド切下である。ポンド貨の平價切下はポンド貨の對米爲替を従來の一磅對四弗三仙から三弗八十仙にまで三〇・五%だけ引下げる謂はゆる爲替平價切下であつた。これと同時に金の買上價格を従來の一オンス一七二志三片から三四八志にまで四四%だけ引上げたので、これはとりも直さずポンド貨の對金價值を三〇・五%だけ切下げる金平價切下を意味する。

今次のポンド切下の行はれた理由。第一に、イギリスの金買上値段は、一九四〇年一月に一オンス一三七志三片——それは對米爲替一ポンド對四弗三仙に照應する——と決定してから今日まで据置かれてゐるにも拘らず、この十ヶ年間に一般物價は約二倍に騰貴してゐる。そのために金産額は減退し、またその一部は横流れしてゐたものであるが、いま買上價格が四割四分引上げられるならば、金準備を増加に導くこととなり、ドル資金の不足に悩めるイギリスにとつて、大きな福音であることは言ふまでもない。

第二に、ポンド切下はポンド貨とドル貨との間の不均衡な價值關係を是正することを主要な目標としてゐる。英米爲替一磅對四弗三仙は、第二次大戰開始後間もない一九四〇年一月に従來の法定平價四・八六六弗を改訂して決定さ

れたものであるが、それは當時の購買力平價たる三・六弗（一九二九年を基準とする一九四〇年の購買力平價）に比較して幾分過大に評價されてゐたといへる。大戦後暫くの間はアメリカ物價騰貴の騰貴率の方がイギリス物價騰貴率よりも大であつたが、最近に於いて一九四八年八月を最高としてアメリカ物價は低落しはじめたのに對してイギリス物價は依然として微騰しつづけ、殊に一九四九年二月から可なりの騰貴を示して來た。かくて一九四八年八月から一九四九年九月に至る間にアメリカ物價は一割下落したのに對しイギリス物價は五分の上騰をみる結果となり、この期間内に生じたドル貨に對するポンド貨の過大評價は切實に感得された。このためにイギリスの輸出が壓迫されたことは確かであつて、一九四九年初以來輸出は急激に萎縮し、その結果金及びドル資金の減少をみるに至つた。かかる情勢の推移を反映して英米爲替の自由相場は既に公定相場を下廻り、平價切下の直前には二弗八〇—九〇圓を示してゐた。そのうへにポンド貨危うしとみて爲替及び貿易のうへで思惑が行はれた爲めに、金及びドル資金の益々減少するのを防戦することが出来ないで遂にポンド切下を餘儀なくされたものであると言へる。

尤もかかるイギリスの輸出不振——金準備の減退の事態に直面してアメリカ側からはポンド切下によつて自立的に輸出振興を圖るべきことを勸奨したのに對抗して、イギリス側としてはポンド切下を行つてもやがて國內物價の騰貴をみれば爲替切下の効果が相殺されるといふことを理由として反對し、むしろアメリカの金價格の引上によるドル資金の擴充の道を探はんことを要求した。英米加三國金融會談をめぐつてたたかばされたかうした英米金論争は、しかし遂にイギリスの讓歩となつて九月中旬ポンド切下が行はれ、アメリカの金價格引上は一應棚上げとなつた。かくしてアメリカの金價格引上即ちドル切下は未だ實行されてはゐないが、理論的には興味深い意味をもつとともに、實踐

的にも重要であるから、次にその性格を詳細に考察しよう。

五 ドル切下の性格

ドル貨の平價切下は現實にはアメリカの金價格の引上の問題として登場してゐる。いま假りに現行價格一オンス三十五弗が五十弗にまで四割二分引上げられるとすれば、これはドル貨の金平價の三割切下を意味する。従つて他の金本位國にしてアメリカと同一律の平價切下を行はざる限り、アメリカのその國々に對する爲替平價は三割だけ引上げられる。然るに具體的な問題としてみると、アメリカの金價格引上即ちドル貨の平價切下の行はれる場合には、これと同時に其他の金本位諸國の金平價も同律だけ切下げられるであらう。かかる場合におけるドル貨の平價切下は、金本位諸國の通貨を一律的比例的に切下げる一般的平價切下を意味するのであつて、各國の對米爲替は勿論のこと各國相互間の爲替相場には何等の變更をうけることはない。

尤もドル切下がかうした一般の平價切下を意味するか否かは、二つの場合に區別して吟味することが必要である。

第一に、少くともイギリスがポンド切下を實行する以前の時點において、従つてイギリスのポンド切下とアメリカの金價格引上とが二者擇一的に取上げられてゐた場合におけるアメリカの金價格引上が、金本位制諸國の金價格を一律に引上げることの意味してゐたことに就いては冗言を要しない。事實一九四九年九月までアメリカの金價格引上がポンド切下と選擇的に問題とされてゐたとき、人々はアメリカの金價格引上の爲めに自國の對米爲替がそれだけ引上げられると考へてはゐなかつたはづであり、このことはとりも直さずドル切下と同時に自國通貨の平價も同一律だけ切

下げられるものといふことを前提的に考へてゐたことを意味してゐる。

第二に、ポンド切下の實行された以後の時機たる今日においてアメリカが金價格の引上げを行つた場合、——日本其他曾つて平價切下を行はなかつた國々がこれとともに平價切下を行ふことは言ふまでもないが——イギリス其他既に平價切下を行つた金本位諸國がこれと同時に一律的に平價切下を實行するかどうかについては二つの見解が存在する。一つは、今後ドル切下の行はれる場合、イギリス及びこれと同時に平價切下を行つた國々はや再び平價切下を行はれないものといふ考へであつて、この見解は今日ドル切下を論議してゐる人々の間において相當廣い範圍で聞かれる。この見解はアメリカの金價格引上賛成論の根據としてポンド切下によつてドル貨が割高となつて來たから、これを是正するためにアメリカとしては金價格引上げを行ふ必要があると主張してゐることのうちに窺ふことができる。このさいイギリスのポンド切下率が新しく行はれたドル切下率と同一であるならば、英米爲替は現在の「一磅對二弗八十仙」から舊相場たる「四弗三仙」に回復されることとなり、イギリスはさきのポンド貨切下によつて英米爲替の不均衡を是正してゐた効果をば、いまやドル貨切下によつて解消せしめられることとなる。これに反して吾々は後述する理由からして、今後ドル切下の行はれる場合においても、これと同時にすべての金本位制國が一律的に金平價切下を行ふことが合理的であると主張する。若し然る場合にはイギリス及びこれと同時に平價切下を既に實行した國々は前後を通じて二度の金平價切下を行つたこととなる。例へば今後アメリカが三割だけ平價切下を行つた場合にイギリスもこれに追隨して同一率だけポンド切下を行へば、ポンド貨の金平價はさきに第一回到三〇・五%の切下が、今度第二回到三〇%の切下が行はれたこととなる。その結果イギリスにおける金價格は第一回到一オンス一七三志三片から二四

八志に引上げられてゐるが、いまや第二回に三五四志五片にまで引上げられることとなる。而して英米爲替はさきの第一回のポンド切下で一磅四弗三仙から二弗八十仙に切下げられてゐたが、この第二回のポンド切下では爲替相場の變更はなく二弗八十仙のまま維持される。

然らばかうした一般的平價切下なるものは、第二次大戰後の國際通貨制度においていかに取扱ふべきものであらうか。ブレトン・ウッズ基金條文第四條第七項「平價の一律的變更は」次ぎの如く規定してゐる。『本條第五項(二)の規定に拘らず基金は全票決權數の過半數を以つて全加盟國通貨の平價の一律的比例的變更を爲すことができる。但し當該變更が割當額總額の一〇%又はそれ以上の割當を有する凡ての加盟國に依て承認されることが必要である。基金が一律的比例的變更の措置を爲してから七十二時間以内に加盟國より該措置に依る自國通貨の平價變更を希望しない旨を基金に通告した場合には、當該加盟國通貨の平價は本項の規定に依る變更を受けない。』ここに言ふ平價の一律的切下とは、一切の加盟國の通貨の金平價を同時に同じ比率だけ切下げるところのものであつて、それはとりも直さず吾々の謂はゆる一般的平價切下である。そして吾々の取扱つてゐるアメリカの金價格引上即ちドル貨切下は實にこの平價の一律的切下に該當するものである。さきのポンド貨切下は英米間の爲替相場の不均衡を是正することを主要目的とするものであつて、それはブレトン・ウッズ基金條文第四條の第五項に規定する「根本的不均衡を是正する爲めに通貨の平價の變更する」場合に該當するものであつたのに對し、このドル切下は同時に他の金本位國の通貨を同一律だけ切下げることの意味する限り、同條文第四條の第七項に規定する全加盟國通貨の平價の一律的比例的切下たる意味をもつものである。かくの如くポンド切下とドル切下とが異つた原因から由來するものであり、従つてその

目的を異にしてゐるものである限り、相互に代替すべき二者擇一的な關係にあるものではなく、これを必要ならしめる原因の存する限り同時並行的に實行さるべきものである。これを具體的に言へば、將來アメリカがドル切下を實行する場合、曾つて平價切下を實行したイギリス及び其他これに追隨した國々も亦アメリカのドル切下に追隨して再びこれと同律的なる平價切下を行ふべきことが合理的であると吾々がさきに主張した根據はここにある。

それでは何故にドルの金平價切下及びこれと結びついて各國の金平價切下が行はれねばならないのであらうか。この問題は、何故アメリカにとつてドル貨の金平價切下が合理的かといふ問題と、何故にその他の諸國の通貨の金平價切下が妥當であるかといふ問題と、さらに何故に其他の國が自國の平價切下と同時にドル貨切下を必要とするかに分けて考へねばならない。第一に、現在のアメリカの金價格一オンス三十五弗といふものは一九三四年一月末にアメリカが四〇・九六%の金平價切下を實行して決定されたものである。然るに當時は世界不況が底をついて物價水準の最も低位にあつた時であつて、それ以來一九四九年に至る十五ヶ年間にアメリカの一般物價は二・一倍に騰貴してゐる。この期間における一般物價騰貴にも拘らず金の買上價格が元のままであつた結果として、アメリカの産金業者は著しい苦境に立つてゐるので、彼等が金の買上値段引上によつて救済されんことを求めるのは當然であらう。

第二に、現在の各國の對米爲替平價にして、自國とアメリカとのそれぞれにおける戦前から今日迄の物價騰貴率の比を基準とした謂はゆる兩國貨幣の購買力平價に一致するやうに決定されたものとし、且つかく算定された對米爲替平價を基準として各國の通貨の金平價が算定されるときは、それら諸國における物價騰貴率の金の値段に對する比率はアメリカと同様に二倍強の高さにおかれてゐることとなる。かくしてアメリカにおいて一般物價水準が金價格の二

倍に登つてゐるという事實は、購買力平價説の教へるやうに對米爲替平價を決定してゐる一切の金本位制國の金價格がその國內物價水準の半分におかれてゐるといふ結果を生ぜしめることとなり、この關聯からしてかかる諸國における金生産を減退せしめ、ひいてはそれらの國々のドル資金を不足せしめることとなつてゐる。かくて世界産金の七割を占めるイギリス連邦において金産額の減少によるドル資金の減退を啣つ事情が最も顯著であり、金買上値段の引上を必要とする事情が最も痛切である。

第三に、各國は金價格の引上げによつて金産額を増加することはできても、若しアメリカにして金價格を引上げざる限り、從來と同一分量の金をもつては同一のドル價額の物資を輸入しうるにすぎない。而かも自國の平價切下の結果自國の通貨によつて表示される同一量の金の價格は引上げられてゐるため、結局從來と同一のドル價格の物資をば從來と同一分量の金をもつて輸入しながら、從來より大なる金額の自國貨幣をもつて購入してゐることとなり、輸入商品の價格が引上げられる。これに反しアメリカも亦ドル貨の平價切下を行ふならば、若しアメリカで物價騰首のない限り、對米爲替相場には變化なく従つて同一ドル價格の物資は從來と同一の自國通貨をもつて購入しうるが、しかし從來と同一分量の金をもつてドル切下率に照應するだけより大なるアメリカの物資を輸入しうることとなるのである。それゆえドル貨切下と各國通貨の平價切下とが並び行はれるならば、各國は一方自國の金産額を増加しうるとともに、他方同一分量の金をもつてしてドル切下率だけより多量のアメリカ物資を輸入しうることとなる。

六 經濟的理性の要請するところ

以上において國際通貨制度における二つの金問題が金本位發展の各段階においていかに解決されたかを明かにしたが、最後にこの金問題は今後いかなる本質的動向をとるか、また吾々はこの問題の解決に對していかなる根本的態度をとるべきかを吟味しよう。

第一に、今後經濟政策は國際通貨制度における二つの金問題を解決するに當り、その通貨政策の目的を全幅的に意識して自覺的に計畫し實行せねばならぬ。世界金不足に由來する一般的不況を克服する目的をもつて全金本位國の一般の平價切下を取上げ、また金偏在の線に沿ふ國際的不況の對策として各國間の爲替調整的平價切下を取上げる。今日では、第一次大戰前の如く金本位制の均衡化作用に放任しておいたのでは、國際通貨上の矛盾を機械的に解消するものではない。しかればとて第一次大戰後の如く、各國が經濟的不況を打開せんが爲めに利己的な立場から行つた爲替引下の全體的な結果として、自のづから二つの金問題が解消されたといふ盲目的成果に期待すべきでもない。現在問題となつてゐるポンド切下とドル切下とは、國際通貨機構に内在する二つの特殊の矛盾を是正する爲めの特定の對策として、その目的を明確に自覺して計畫されねばならぬ。これによつて金本位制の機構的矛盾から機械的に強ひられるデフレーションの自然的強制を避けるとともに、またかかる機構的デフレーションを克服する爲めに各國が競争的に爲替引下を實行せねばならぬといふ運命的強制をも避けて、世界金本位制のもつ機構的矛盾を科學的に分析し、それに内在する矛盾の發現を自覺的に克服してゆくといふ理性の強制に従ふことができる。

第二に、今後の經濟政策は、金本位制の機構的矛盾に由來する國際的デフレーションを解決するに當り、國際協調の精神に則つて國際的に計畫し實行せねばならぬ。曾つて一九三〇年代に國民主義的な立場よりする爲替引下競争か

ら國際不安を招來したといふ犠牲を拂つて結果的に克服した二つの金問題をば、今後は國際協調的精神により解決してゆくことが可能であり且つ必要である。かうした歴史の教訓を學んだ今日のブレトン・ウッズ基金制は「國際通貨問題に關する協議及び協力の機關たるべき常設の施設を通じて國際通貨協調を促進する」ことを第一目的としてゐるのである。

最後に、現段階における目的自覺的・國際協調的な平價切下は、國際的デフレーションの深刻化した後ちの對策として強制されて實行すべきではなく、デフレーションの未だ實現されざるに先立つて先慮豫防的な政策として計畫され實行されねばならぬ。資本主義の發生以來今日まで百七十餘年にわたる發展過程において經濟の長期的變動は、五十年の振幅をもつて三度び繰返へして來た。一七八九年から一八四九年に至る第一次波動、一八四九年から一八九六年に至る第二次波動、そして一八九六年から一九三三年までの第三次波動がこれである。而して第一次波動の下降期の底に近い一八四〇年代及び第二次波動の下降期の底に近い一八八〇年代にはそれぞれ金鑛の發見があつて長期的上昇への轉向が結果されたのに對し、第三次波動の下降期の底に當る一九三〇年代には各國通貨の平價切下が行はれて長期的上昇への轉向が實現された。然るに一九三三年から上昇しはじめた第四次の長期的波動は一九五〇年の今日やうやく頂上に登りつめて、いまや下降に轉向する轉機にあることを思はしめる。今後長期的變動において下降過程が進展して底に近づくころ、金増産によつて機械的に經濟上昇に轉せしめられか、或ひは平價切下によつて人為的に上昇に轉換せしめられるかの二つの道が可能ではあるが、しかしかうした長期的不況が底をつくまで放任しておいたうへで初めて上昇に轉向せしめることは、私的企業を基盤とする資本主義經濟に對して甚だ大きな苦痛と犠牲とを負は

すこととなる事理を銘記せねばならぬ。今後の經濟政策は長期的不況をして底をつくまで進展せしめた後、はじめてこれを正常的な經濟水準まで回復するといふ經過を辿らないで、むしろこれに先立つて各國國民經濟の安定と發展とを保障しうる正常な經濟水準を維持するに必要な金生産を保障しうるに足る金價格を設定すべきである。今日現實に問題となれるポンド切下・ドル切下を取扱ふに當つても、世界金本位制をして矛盾なく機能せしめうるやうな適正なる金價格を科學的に算定し、豫め前以つて目的自覺的且つ國際協調的に、一方全金本位國の金平價を一律的に切下げるとともに、他方各國相互間の根本的な不均衡を是正するやう爲替平價を改訂するやう策定せねばならぬ。いまや長期的變動の波が世界的不況へ轉向せんとするおそれのある際、豫め各國の國民經濟の安定と發展とを保障しうるやうな貨幣價值水準を實現するといふ豫防的措施をとることは、國際的デフレーションの苦惱を避け、これによつて醸成されるおそれのある國際不安を豫防するといふ關係において理性の要請に應へる所以である。

(註) N. D. Conradtief: Die langen Wellen der Konjunktur. (Archiv. f. Sozialw. u. Sozialp. 1926.) 赤松要「長期景氣波動について」經濟學經濟史の諸問題

然しながら翻つて考ふるに、世界資本主義の安定と發展とを保障する爲めに金の生産とその國際的移動を媒介とすることは、たとへそれが目的自覺的・國際協調的且つ先慮豫防的に實現されたとしても、なほ國際通貨制の狭い範圍に踞踏してゐる謂はば通貨的理性に應へるにすぎず、未だなほ經濟的理性の要求に應へるものではない。いま國際通貨制度の範圍を超越して、金の國際的移動を媒介とすることなく直接に商品の國際的交流そのものうちに世界經濟の均衡を自覺的に實現することとなれば、金價格の正常化によつて世界金存在量の適正化を圖るといふ國際通貨制

度における金の問題そのものも解消し、ここに本来の經濟的理性への道が開かれることとなる。

さて國際通貨制度における金問題の本質的動向を具體的に考察する爲めには、今日の如く資本主義國群と社會主義國群との對立せる歴史的情勢の下においては、それぞれの國家群の内部における各國相互の關係と兩國家群相互の關係とを區別することが必要である。第一に、資本主義國群の内部においては、國際通貨制度上の二つの金問題は現在ポンド切下及びドル切下問題のうちに集中的に表現されてゐる。吾々は茲にドル切下及びポンド切下が金不足と金偏在の矛盾を克服して資本主義國群内における國際的不況を打開せんとする通貨政策たる意義をもつことを想起すべきである。然るにこのことは今日なほ此處では金の生産と金の移動を媒介として世界經濟的均衡を實現せんとするといふ建前を前提としてゐる。しかし資本主義國群の内部における各國相互の流通關係については、今日すでにかかる金の國際的移動を通じて世界經濟的均衡を實現するといふ通貨的態度を清算することが合理的且つ可能なる段階に到達してゐる。そしてこれに代つて各國の國民經濟の構成とこれを包括する世界資本主義國群の統一的構成をば、國際協調の精神によつて構想し、直接に資源及び生産物の國際的配分を實現することによつてこの構想を實現化するやう努力すべきである。世界金本位制運営の現状をみるに、南アフリカ其他各國の金鑛から掘り出した金をばアメリカに運搬し、これをアメリカの山中に埋藏するといふ愚擧を繰返へすことを媒介として商品の國際的移動を均衡化してゐるのである。若し人類が眞に叡智にめざめるならば、金の生産と運搬と埋藏とを通じて實現してゐる世界經濟的均衡化をば商品流通の面において國際協調の精神を體して目的自覺的に計畫し實行するやう努力すべきである。

第二に、社會主義國群の内部における金問題としては、一九五〇年二月末實行されたソ連の通貨改革が注目される。

從來ドル貨を基準としてゐたのを金基礎に切替へるとともに、對ドル相場を一ドル對五・三〇ルーブルから四ルーブルに引上げるといふ平價引上の措置を採つた。從來は社會主義國群の内部の通商協定においてさへドル表示を餘儀なくされてゐたのが、いまやドル圏及びポンド圏に對抗してルーブル圏を設定して同盟國及び衛星國間における通商をばルーブル本位にて自主的に行ひうる道が開かれることとなつた。またこのルーブル貨の平價引上により、一方外國とくに中國及び東歐諸國より商品を安價に購入しうる事ができ、また他方では國內物價を引下げることができる。資本主義經濟においては物價下落は収益減退を生じて私的企業によつて指揮される經濟的活動、雇用水準の萎縮を結果するため、かかるデフレーションを經濟的矛盾として排除せんと努力してゐることは纒々述べたところである。これに對し國家企業を基盤とする社會主義經濟においては、物價引下はそのまま企業的活動・雇用水準の低下を惹起するものでないのみならず、むしろ實質賃銀の向上によつて國民的厚生を増進しうる効果をもつ。資本主義經濟がデフレーション對策として金價格引上、平價切下を採りあげんとしてゐる際、ソ連が平價引上による物價低落によつて國民所得の實質的向上を意圖してゐる所以は茲にある。社會主義國群の内部においても現段階では、國際通貨制度は金の國際的移動を媒介として成立してゐるのであつて、今回のソ連通貨改革も亦この原則に沿ふて實行された。しかしこの國家群の内部においては資本主義陣營内部におけるよりも、國際經濟の統一的構成の可能性が大きく、従つて國際通貨制度を金の拘束から解放することは遙かに容易である。

第三に、資本主義國群と社會主義國群との間における金問題に移る。まづ現實の國際情勢の下では、兩國家群相互間の流通取引の最後の決済手段としてはなほ金が殘存してゐる。然るにこれら兩國家群の間の對立關係が尖鋭化する

きは、國際通貨の機構を通じて金鬭争のたたかはされる可能性が存してゐる。一九五〇年三月はじめソ連が東洋市場に多量の金をダンピングしたため金價格がブレトン・ウッズ基金の公定價格たる三十五弗を割つて一時二十八弗まで下落したことが傳へられてゐるが、若しもこれが事實なりとして金のダンピングが続けられて金價格が引續き低落するならば、現在の金保有國及び金産出國は打撃をうけることとなる。尤もアメリカがこの放出金の全部を公定價格で自由に買入れる限り、金價格は公定價格以下に留りえないことは當然である。これに反して若しアメリカがかかる實力と意志とを有せず、金ダンピングの爲めに金價格が世界的に下落した場合、資本主義國群にして依然として今日の如き國際的金本位制に固執してゐる限り、金本位制の機構的矛盾として國際的デフレーションが誘發又は促進されることとならう。それゆゑ金放出國にして金價格を世界的に崩壊せしめるだけの實力があれば、金ダンピングは資本主義國群に對してデフレーションを強制しうるのであつて、これこそ正に金本位制に内在する機構的矛盾を利用して資本主義經濟に持續的不況を強制せんとする通貨攻撃たる意義をもつものといへる。かうした事態關聯からみてもまた、資本主義國群において經濟的理性に順應して金機構の拘束から解脱し、直接に商品流通の世界的均衡を實現するやう國際協調的計畫を樹立することの必要なる所以が了解される。しかし吾々はさらに進んで資本主義國家群と社會主義國家群との對立を清算して、兩國家群を統一した全體的な世界經濟を構成することを理想として努力せねばならぬ。ただしこれによつてのみ各國の國民經濟及び世界經濟の眞の安定と發展とを保障することができるからである。かかる理想の實現した曉においては、金は國際通貨として最後の地位を奪はれ、本位制の王座から卸りねばならないのであつて、茲に最高の經濟的理性の要請が買かれることとなり、人間叡智の最後の勝利がみられる。(一九五〇・四・三〇)